

その後、一時的には回復したものの、更に、胸椎カリエスになり、絶対安静の身で五年間寝たきりという生活を余儀なくされてしまった。ようやく再起できたのは昭和三十年になってからである。

終戦後、十年近くたってから父戦死の報が入った。

父は、敗戦後の武装解除の際に満人の暴徒の襲撃を受けて戦死をしたとのことであった。若き日、希望を抱いて大連に渡った父は、日本の運命と共に四十三歳の若さで満州の土となってしまった。

幼い五人の子供を連れて満州から引き揚げ、慣れない土地で子供を育てた母は、苦勞に苦勞の連続であった。その母は九十歳を迎えた。

私は、手に職をつけたおかげで、今日まで生きることができた。感謝の気持ちでいっぱいである。

満州へ、満州へ！

そしてその果ては……

長野県 長沼 とめ子

思い起こせばあの衝撃の敗戦から五十数年、人間が宇宙に旅行できるのも、そう遠いことではないと言われる時代になってきました。

人々の思いの中には、もうあの時代のことなどはひとかけらも残っていないでしょう。否、知らないことなのでしょう。暖衣飽食となり、消費は美德と言われる昨今は、物心両面からせいたくな世の中になってしまい、苦しみとか、悔しさとかが、つらさとか、悲しさとかの感情は、あまり感じなくなってしまうました。

今の人に、あの時代に私たちの味わった苦しみ、悔しさ、つらさ、悲しさなどを経験させる必要はないでしょう。いや、絶対に経験させてはならないことなのです。

しかし、私のように現実にそのことを経験し、そこから何とかして逃れてきた者にとっては、片時も忘れられない悪夢なのです。でも、その悪夢も今になると、ある面では、郷愁の時代でもあるのです。

あまりにも悲惨だった終戦から引揚げの時代のことなどを、思い出すままに書きつづっていると、あの事もこの事もと、いろいろな思い出が、走馬灯のようによぎっていきます。

私の半生の縮図としてまとめてみたこの記録、今の若い人々が読んでどんな感想をもつか、興味もあります。

平和である今日、これからも平和でありたい日々のために、少しでも役立てば本望です。

私は、大正二年九月九日、長野県下伊那郡豊丘村で、代々農業をしている丸岡家の次女として生まれました。両親の慈愛のもとに、何一つ不自由なく育ち、地元の河野実業補習学校を卒業して、家事手伝いをしてながら花嫁修行に精を出していました。もともと世話

好きな性格でしたので、女子青年団に入っていました。そのうちに副団長に選ばれて、張り切って毎日を楽ししく過ごしていました。

そのころは昭和大恐慌の最中で、そのうえに、東北地方から北陸地方の一带に冷害が続くという、大変な時代でした。特に農村は、今日食べるものが無いといった悲惨な生活をしているところもあり、貧乏のどん底にある時代でした。家では養蚕もやっていました。一貫目二円か三円にしかならないように、父や母も頭を抱えていたのを思い出します。

昭和七年に満州国が建国し、その理想として「五族協和」「王道楽土の建設」というスローガンが掲げられました。この疲弊した農村の窮状を救うには、満州開拓をするほかに途はないということで、満蒙開拓が国策として大いに奨励されるようになり、満州移民は「焔の戦士」ともてはやされて、鐘や太鼓で送り出されるような時代でした。

若い独身の農村男性が、開拓移民として渡満し一生懸命に働くようになると、独り身ではいろいろと日常

生活でも大変だから、世帯を持たせなければならぬ、家族で腰を落ち着けて開拓に精進させることが大切だということになり、今度は、開拓の花嫁が必要になってきました。

私も、女子青年団の副団長をしておりましたので、花嫁募集の勧誘に青年団に来て、開拓団の状況などを話していく人と会うことが多くなりました。

私の村に筒井愛吉さんという方がおられました、その息子さんも開拓移民として満州に入植しており、満州移民についてはとても熱心でいろいろと世話をしておられました。今でいう結婚相談員のようなこともしていて、満州の良いことをいろいろと話し、花嫁候補を探しておられました。あまり上手に話をされるのでついつい引き込まれてしまうことがありました。

そのうちに、縁があつて主人となつた、長沼正平との結婚話が持ち上がり、文通を始めるようになりました。

そのときはまだ本人とは会つたことはなく、ただ写真だけでの見合いで文通をし、お互いを知り合うよう

になつたのです。

正平は、現役兵として兵隊に行つていましたが、満州は広く土地もよく肥えていて、農業には有望なところだということを、隊内でよく聞いていたそうです。

昭和七年に除隊、しばらく地元の青年訓練所の指導員として勤務していましたが、満州への夢が捨てきれずに移民に応募したのです。

まず茨城県内原の訓練所に入所して半年間、開拓移民に必要な訓練を受け、第一回の武装移民として渡満したのです。第一回ですので試験的な満州開拓移民集団だったので。

昭和七年当時は、満州事変がどうにか終結を迎えた年ですが、中国東北部全体の治安はまだまだ乱れており、各所で日本軍と中国の軍閥軍との小競り合いが繰り返されていたのです。そのうえに、抗日遊撃隊や土匪等が武装蜂起をして、各地各所を襲い略奪破壊などの暴挙をなして治安を乱していました。移民団も随所で襲撃され、戦死する人も増えてきました。小銃や機関銃で武装をし、鉞を左手に銃を右手に持つての開拓

事業だったので、武装移民と言われたのです。

その年の十月に主人たちは、出征兵士とまったく同じように、旗や歓呼の聲に送られて出発したそうです。

第一次武装移民が成功したら、第二次、第三次……と後統部隊を送り込む計画になっていたそうです。それほどにまでしても満州移民をしなければならぬくらい、内地では切羽詰まっていたのでしょう。

移住したところは、ソ満国境に近い佳木斯というところで日本陸軍の歩兵第六十三連隊が駐屯している町でした。着いたその晩から匪賊の襲撃があり、銃を持って部隊と一緒にやって応戦したそうです。本当は、移住するところは佳木斯ではなく近くの別なところが予定地であったのですが、匪賊討伐で動くことができずに、一冬、佳木斯にとどまることになったそうです。

翌昭和八年の春、雪どけを待って先遣隊として銃と食糧を持って、佳木斯から約六十キロ離れた本来の移住地である永豊鎮に進出したのです。先遣隊は随分と

苦勞をして、本隊受け入れの準備に奔走しました。

夏になってどうにか受け入れ態勢が完了し、落ち着いたところで本隊約五百人の武装移民が永豊鎮に移動し、第一次武装移民団の本拠地がここに定まりました。

本隊は、東北十一県の出身者の中から選抜された精鋭だったそうで、いろいろな条件があったとのことでした。その条件とは、まず家庭環境では長男は駄目、二男か三男で二、三年は実家から生活経費の仕送りが可能な家の子弟でなければいけない。軍歴では、上等兵で除隊した者でなければいけないという厳しい条件だったとのことでした。しかし実際には一等兵の人もいたそうです。

正平は、九人兄弟の四男でした。そのまま家にいれどどこかの家に養子になるか、都会に職を求めて家を出るかしなければならぬ運命にありました。もともと農業は好きでしたし、大きな夢を持っていたので、大変な苦勞があることを承知のうえで応募したのです。

満州事変で戦場となったところですので、抗日、反日の武装分子や匪賊が、至る所で出没跋扈していたので、日常生活は兵隊と同じで、再び軍隊に召集されたみたいだったと言っていました。

昭和十二、三年ごろまでは、内地との文通も、野戦郵便局気付で切手もいらぬ軍事郵便扱いでした。

当時は、日本政府の満州に対する政策もはっきりしておらず朝令暮改式で、相当に無茶をしていたようです。入植地にいた先住の土民には、五円ぐらい渡して追い払い、その耕地そのままそっくりと移民側に引き渡し、耕作をしていたようです。そんなやり方でしたので土民には不平、不満がくすぶって、常に反目をしていたそうです。

そんな情勢の中、日頃のうっ積が爆発してしっぺ返しがありました。そのしっぺ返しというのが、昭和九年三月に起きた事件です。抗日運動の指導者謝文東に指揮された土民たちによる日本人襲撃があり、佳木斯に駐屯していた歩兵第六十三連隊の飯塚連隊長以下二十数人の戦死者を出した事件で、土龍山事件と言われ

ている満州開拓初期における悲劇です。農耕と匪賊対策とで、大変な苦労だったそうです。

最初に選抜された約五百人の精鋭も、そのうちにだんだんと「屯墾病」という一種のホームシック病にかかり始めて、士気は低下してきたそうです。荒れてきた気持ちを整静化する手段として、ひそかに「阿片」を吸う者がでて、二円持って売春婦を買いに行く者もあり、生活それ自体も荒れに荒れてきたそうです。

そんなときに「開拓の父」東宮大佐（当時は大尉）が内地から視察にいらしてみんなに話をしたそうです。「これじゃ駄目だ、こんな状態では五族協和も、王道楽土の建設も、満蒙開拓も夢のまた夢だ。みんなは何のためにここまでできたのか？ もう一度考え直す必要がある」と激しく叱って、満州建国の意義、開拓精神の啓蒙など根本的な話をしてみんなを励まし、その後、みんなは少し落ち着きを取り戻して、それでも二年ぐらいの間に五百人の精鋭は三百人余りになったそうです。

しかし、残った三百人余りの人たちは、みんな思想

堅固、質実剛健な人ばかりで、ようやく開拓事業も軌道に乗ってきました。

男ばかりの集団では、これから大地に根を下ろして生涯を開拓にささげて、全力を投入することは至難なことであり、このままでは駄目になってしまおうということで、家庭を持つことが奨励されてきたのです。

そこで、内地における花嫁募集が始まったのです。各県でも出身移民者に対しての花嫁探しに力を入れるようになってきました。このような経緯で夫となった正平との文通、交際が始まったのです。

昭和九年七月に、永豊鎮から満州開拓の宣伝と花嫁探しの任務により、正平が内地に帰ってきました。たまたま正平の父親が病の床に伏せていたので、その見舞いもあって選ばれたようです。長野県からは、二十人の花嫁を連れて帰ることになっていました。

早速、私たちは結婚式を挙げました。両親をはじめ兄弟姉妹、親せき、友人等に祝福されました。正平二十六歳、私二十二歳でした。私は人並みに結婚式を挙げられただけ幸福でした。他の花嫁は、ほとんど花婿

の写真で式を挙げたのです。

結婚式は終わったのですが、主人は毎日毎晩、満州開拓の宣伝と花嫁候補探しのために県内のあちこちを飛び回って、ほとんど家に戻ってきませんでした。私はその間、なんとなく仕事も手につかずに過ごしていました。

ようやく二十人の花嫁が決まりました。写真を送ったり、送ってきたりで慌ただしい見合いでした。みんな花婿不在の写真結婚式でした。花嫁の横の座布団の上に写真の花婿がいるというかっこうです。

七月に帰ってきて十月まで、本当に忙しく走り回っていました。私の村、豊丘からも三人の花嫁が決まりました。

私も、渡満する日が近づくに従って忙しくなってきました。女子青年団での送別会、学友によるお別れ会、親類の送別会などが続き、慌ただしく過ごしていつて新婚気分などは少しも味わえませんでした。

在郷軍人会による送別会も、飯田市内の一流の料亭で盛大に行われました。会長さんから花嫁さん一同に

「竜峽乙女、しつかりやれ！」という意味の励ましの言葉を頂いたことを今でも鮮明に覚えています。

いよいよ出発の日となりました。駅までは村民総出の見送りでした。打ち振られる日の丸の小旗や、青年団の団旗が印象的でした。歓呼の声が大きくこだまして、駅前は大変でした。まるで出征兵士と同じです。

出征兵士もこんな気持ちで送り出されたのかとしみじみ感じました。家族などとの別れでも、涙も出ませんでした。何か感激に酔いしれていたようでした。地元新聞にも「緞の戦士、開拓の花嫁を引き連れて、雄々しく満州へ」と書かれていたそうです。

長野市では、県庁で二十人の花嫁と五人の移民団員が合流し、お互いに自己紹介などを行いました。ここで全員が揃ったのでした。

県庁での壮行会が行われ、その席上、善光寺の智光お上人様からも心温まるお話を頂きました。長野を出発して東京に向かいました。東京では、宮城遙拝、明治神宮参拝、拓務省、東京府庁等関係先を訪問して、あいさつを行い激励を受けました。その日は東京会館

で一泊し、翌日、東海道線に乗って神戸に向かいました。神戸で一泊のうえ神戸港から、五色の紙テープで別れを惜しみながら出帆をしました。これで日本ともお別れかと思つたとたん、今まで出なかつた涙が止めどもなく流れてきました。娘との別れを惜しんで神戸まで見送りにきてくれた父との涙の別れは、まさにドラマでした。父は「とうとう神戸まで来てしまつた！」と照れ隠しの笑いをしていました。

船は、名にし負う玄界灘の荒波をけつて、一路大連に向かつて行きました。しかし私たちは、船酔いで横になつたまままで過ごし、内地がだんだんと遠ざかつていくなどの感傷どころではありませんでした。この時のことは、後になつてもほとんど記憶にないくらいです。

やっと大陸の玄関口、大連港に着きました。船酔いも治まり元気になりました。大陸の風景は、長野とはまったく異なつて、遠くに来た実感をしみじみ味わいました。ここでも長野県人会の方々の大歓迎を受けました。奉天、新京でも同じく県人会の心温まる歓迎行

事がありました。やはり県民のきずなは強いものだということが分かり、心強いものを感じました。

哈爾濱からは、松花江を船で渡ったのですが、満人がいっぱい乗っている汚らしい船でがっかりしたことや、佳木斯に着くまで船内に充満している悪臭に閉口したことなどは、今になっても忘れ得ないことです。

だんだんと船が佳木斯に近づいてくると、まだ写真でしか会ったことのない花婿さんのことを思い浮かべながら、気もそぞろになっている花嫁さんでした。無事に佳木斯に上陸しました。船着き場には、移民団の幹部の方々や、写真でしか会ったことのない花嫁さんを出迎えに花婿さんたちが来ていました。皆さん、ひげをそり、髪をなで付けて、身ぎれいなかっこうをしていて立派でした。出迎えにきた移民団の佳木斯出張所長さんが、花婿さんに向かって、「おい、お前たち、嫁さんを取り違えるなよ！」と冷やかしていました。なかには、花嫁さん本人が先に着き、見合いの写真は一カ月もかかって後から届いたという笑い話のような人もいました。

佳木斯で数日休みをとりました。荷物も着かないので、内地から着てきたままの姿で最終目的地の永豊鎮に向かつて、約六十キロのがたがた道をトラックにゆられながら、未開の長野部落に入りました。ここはまだ電気もなくランプの明かりでしたが、長野県出身の移民団の人々から大歓迎を受けました。こうして、満州開拓移民としての第一夜を過ごしたのです。苦労もあるが夢もあるという気持ちでした。この日から約二年間にわたる満州での生活が始まったのです。

ゆっくりと休む間もなく、翌日から畑に出ました。大豆の刈り入れが遅れていて猫の手も借りたいときだったのです。千メートル×百メートルの一町歩が、一世帯に割り当てられました。かいがいしいモンペ姿に姉さんかぶりの若婦人の野良仕事の姿には、殿方はみんな大喜びで仕事の能率も上がり、随分とはかどったようです。共同生活はしばらく続き、貧しくとも楽しい日々でした。しかしその反面、幾度か匪賊の襲撃を受けて銃弾の洗礼を受けたこともありましたが、そんな油断のならない日も過ごしていました。みんなで励

まし合い助け合いながら生活をしていました。楽しいことよりも、苦しくてつらいことの方が多かったと思います。そんなときの心の支えは、開拓の情熱に燃え理想国家建設への夢を大きく膨らませていた主人の愛情でした。

武装移民集団の一員として四年ぐらい過ごしてきました。満蒙開拓の新しい計画の下に、私たちの武装移民も満蒙開拓団と変わり、弥栄村へと移行しました。これでこの北満の地に根を下ろして、第二の故郷として開拓に精励し、理想実現に向かって改めて決心したものです。

広い広い大陸、満州の地平線に大きく真っ赤な太陽が沈む眺めは、ほんとうに美しいものです。「ここはお国を何百里、離れて遠き満州の、赤い夕陽に照らされて……」という軍歌のとおりです。そして赤い夕陽が地平線のかなたに沈むと夜の帳がおり、ランプの明かりが家々の窓からぼんやり揺らぐのを見ていると、急に遠く離れた下伊那の故郷が思い出されて、涙が止めどもなく流れてきて主人を困らせたものでした。

子供も次々と授かり、五人の子持ちとなりました。そうなると子供の養育に追われる毎日となりました。

昭和十七年、長男が小学生として弥栄国民学校に入学しました。当時は、弥栄村をはじめ各地の開拓団での文化の中心は学校でした。初めて子供を学校に通わせる若い親は、ためらいもなく学校の門をくぐりその先生の教えを受けて、親子共々に新しい教育を受けて心と心の触れ合いに満足感を味わっていたのです。

学芸会あり、運動会あり、それに学校の行事ではなくその村の開拓団の行事でも学校が中心だったので。それこそ全員が一丸となって何もかも忘れて一時を過ごせるのが学校でした。

国策遂行の意欲に燃えた新しい開拓団や入植者が、続々と入ってきました。永豊鎮は弥栄村訓練所となり、新しい人々に対して開拓に必要な技術や生活方法を習得させるための訓練を担当していました。希望に燃えた人々を次々に受け入れ、訓練をしては近隣各地の開拓団に送り出しました。やりがいのある充実した毎日でした。

村の中央を緩やかに流れる柳樹江へ遊びに行くと、子供たちが一時間ぐらいの間に、飯盒にいっぱいになるくらいの小魚をとってきて、得意になっていたこともありません。六月も半ばとなると、ふくよかな香りのするスズランやヒメユリや芍薬や、その他のいろどりの豊かな野花が、辺り一面に咲き乱れ、まるで花のじゅうたんを敷きつめたようになります。

その中を乳牛や綿羊の群れがゆっくりと移動している様子を見ると、大陸ならではの風景で、「乳と蜜の流れる里」そのものです。

ほんとうに満州に来てよかったと、心も体も伸び伸びとする毎日でした。一、二年後に襲ってくるあの悪夢のような生活など、誰も想像することのできない、のどかな天地でした。

この弥栄村にも、戦争の足音は段々と近づいてきました。こんな事態になるとはある程度想像はしていたのですが、こんなに早くくるとは予想外でした。

七月二十日、主人に赤紙がきました。覚悟はしていましたが、いざ、それが現実のものとなると、これか

らどうしていいのか、涙の方が先に流れてしまいました。主人も後ろ髪を引かれる思いで我が家を出て行ったと言っていました。その時代のことですから、家外では涙など見せることはできないので、唇をかみしめながら送りました。

昭和二十年八月八日には、思いもよらずにソ連軍が、北満国境から戦車を先頭に怒涛の如き勢いで侵入してきました。

弥栄村に残っていた五十歳以下の男性はすべて動員されて、九日の朝に佳木斯の部隊に入隊してしまいました。永豊鎮に残った男性は、六十歳になった弥栄国民学校の先生が一人でした。

これからどうすればいいのか話し合いをしても、何もよい知恵は浮かんできませんでした。とりあえず全員、国民学校に集結しようということになり、各人の家で避難の準備をして待機をしていました。九日の真夜中、篠突く雨の中、開拓団本部から至急電話が入り、「あす早朝六時に、全員団本部前に集合。各一人週間分の食糧を持つこと」とのことでした。

いよいよ、恐れていたことが現実となつてしまいました。身の回りの整理もそこそこに、中身は食糧ばかりの重いリュックサックを背負いました。十歳の男の子を頭に四人の女の子、それに私自身が妊娠五カ月の身重で、先行き不安で頭が狂いそうでした。

長男には朝までいり米を作らせました。九日の晩は五人半の子供を、なだめすかして一睡もせずにご過ごしました。

夜明けを待つて、小作人として働いていた満人を起こし、一週間ばかり留守にするからと馬車を仕立て、隣近所に声をかけ合つて家を出ました。

十有余年、第二の我が家として住み慣れた家と、手塩にかけて愛育した大小の家畜に涙して別れました。再び戻ってくる事ができればよいがと、あきらめ切れない気持ちでいっぱいでした。長く一緒に働いてくれた小作人家族とも手を取り合つて別れを惜しみ、「後を頼みます」と言つて鍵を渡しました。

馬車に荷物と家族が乗り、夢中のうちに集結地に向かいました。途中で我が家の開墾地を通りながらいろ

いろな思い出がよぎりました。三十ヘクタールの耕地を一周することもできなかったことを残念に思いました。

弥栄駅には、あちらこちら荷物をいっぱい持った避難家族が集まってきました。女、子供の泣き叫ぶ声、どなり合う声などで騒音のるつぼでした。避難列車の来るのを一日中待つていました。

墳墓の地と定めていたこの弥栄、千万無量の思いを残して赤い太陽が西の地平線に沈むころ、ようやく無蓋列車が到着し、私たちを乗せてくれました。

苦難の一頁が始まったのです。十日の夜から、また雨が降り出しました。雨、雨、また雨、無蓋車の中はすし詰め状態、雨水を避けることもならず体はもとより、リュックサックの中まですぶぬれとなりました。子供の泣き叫ぶ声、大人たちのどなり声などが入り交じつて、気が変になりそうでしたし、老人の中には本当に気が変になった人も出てきました。

やつとのこと佳木斯駅に着くと、「これから先は、橋が落ちるから七歳以下の子供は乗せられない」と言

われました。そこでまた一騒動があり、持ってきた荷物をほとんど満人機関士に渡し、やっと子供たちと一緒に行くことを許されました。

私たちが、日本から夢と希望を持って第一歩を記した思い出多きところが佳木斯だったのに、今見る佳木斯は、真っ赤な火柱があちこちで立ちのぼる、無残な姿の街と化していました。関東軍も警察も既にその機能を失っていたのでしょう、何もしてもらえない有様でした。

それから避難列車は更に南下して、四日間も無蓋車のなかで過ごしましたが、雨と寒さと飢えとの闘いで、子供たちは泣き叫んでいましたが致し方ないことでした。こんな状態で、精神の安定を崩した若い母親が次々に出て、胸の痛くなる思いでした。

四日後に綏化に到着しました。途中で列車が止まり、下車してぬれた着物を焚き火で乾かし、五人の子供と、みんなの列に遅れないようにするのに人一倍の気をつかいました。そんな気持ちがあるのに心は隅に残っているのでしょうか、家人から「うなざれている

声がしていた」と起こされることがあります。

綏化では、飛行場に集められました。あちらこちらの避難民が、約三万人ぐらい格納庫のコンクリートの床の上に草を敷き、母子抱き合ってわずかな暖をとる、仮寝の夢を結びました。北満の九月近くは、もう夜は寒く、格納庫での生活が続くうちに、悪性の麻疹が流行し始め、特に四歳ぐらいから下の幼児はほとんどかかりました。三歳だった四女の多勢子もとうとううつってしまい、回復の見込みがなくなってきました。かわいそうでしたが薬もなく、もちろん医者に診てもらうこともできずに、ただ苦しむのを体をさすってやるだけでした。「お餅を食いたい」と言ったので、朝鮮人が売りにきた餅を買って食べさせると、うれしそうに私の顔をじっと見つめながら二切れ食べてくれました。これが多勢子が食べた固形物の最後でした。

毎日、朝になると新しい土饅頭が増えてきます。こんな生活を繰り返しているうちに、やがて待望の南下が始まりました。九月二十日ごろだったと記憶していますが、みんな喜んで準備を始めました。

まだ苦しそうな多勢子を長女に背負わせ、私が荷物を背負い両手に二人の女の子の手を引いて、長男とやつと緩化の駅に行きました。他の避難民の子供も同じ状態で、意識がもうろうとしていままに背負われているのを多く見受けました。私たちの周囲で、六人の幼児が次々と息絶えてしまいましたが、次の駅までそのまま連れて行きました。多勢子も背中に負われたまま死んでしまいました。次の駅で、爪と髪の毛を残して廢坑の穴に埋めました。ここでは多くの幼児が同じように埋められました。

列車が駅に止まるたびに、決まって満人が襲ってきて略奪暴行をし、それにソ連兵も加わって時計や眼鏡などまで強奪していく有様でした。底知れぬ恐怖の避難行での、ただ一つの希望は早く大連に着くことでした。

緩化の飛行場を出てから約一カ月後の十月十四日、身も心も、それこそくたくたになり、氣息奄々として大連に着きました。希望を持って着いた大連でしたが、寒さと飢えと病が待っていたのみです。

元大連実業学校が收容所になり、一教室に三、四十人が收容されました。着たきり雀で、シラミと垢と栄養失調の体で、目ばかりがギョロギョロしていました。身の回りの品はほとんど道中で強奪されたり、満人に提供したりして何も無く、ただ万年筆を一本持つていましたが、これだけはなんとしても手放したくありませんでした。海軍にいる実兄からの贈り物で大切に使っていた物でした。しかし背に腹は代えられぬのとおり、遂に食べ物と交換してしまいました。これからは、働いてお金を得るほかに手だてはなくなってしまうました。五カ月の身重で避難行を始めて、途中でさんざん苦勞し、無理を重ねてここまできたのだから当たり前とはいえ、足がむくみ半病人という姿になっていました。

妊娠七カ月までならば、病院で処置してもらえるとの話で、二、三人の奥さんは、早く身軽になりたい一心から病院に行きましたが、衰弱がひどく抵抗力がなくなっていたので、次々と亡くなられてしまいました。そんな悲惨な姿を身近に見ていただけに、私はそ

の気になれず、なるがままと開き直った気持ちになつていました。

十二月三十一日夜、陣痛が始まり出産しました。同じく弥栄村から一緒だった小林正子さんも同じ部屋で出産しました。

主人が出征の折に、「今度産まれる子供が男だったら、武彦という名を付けよ」と言われました。それほど男の子を期待していたのでしょう。期待どおりの男の子でした。しかし無念なことに、せっかくこの世に生を受けたのに、四十日間の収容所生活を味わっただけで息絶えてしまいました。

小林さんも、期待していた女の子でした。上が三人男の子だったので、どうしても女の子が欲しいと言っていました。待望の女の子でした。しかし天は皮肉なものです。小林さんは、産後の肥立ちが悪くそのまま帰らぬ人となってしまいました。せっかくの女の子も、母親の後を追うようにして亡くなってしまいました。今はの際に子供と私を枕辺に呼んで、「長沼さん、どうしたらいいの」と悲痛な言葉を残して目を閉じら

れました。あのときの胸を締めつけられた思いは、今も脳裏に焼きついています。折に触れ思い出しては悲しくなり、涙が流れます。もう一人、やはり同村で一級上だった吉川たみ子さんは、四人の子持ちでしたが避難の途中で二人を亡くされました。お互いに励まし合った間柄でしたが、子供を亡くしたショックから性格が内気になり、沈みがちで一人ぼつねんとしていることが多くなりました。そのうちに床に就くようになり、日に日に症状が重くなり、「私はもう駄目、子供たちをよろしく願います」と言葉を残されました。その悲しげな面持ちに、こちらもらい泣きをしてしまいました。幾日もたたないうちに、脳を侵されて、布団の衿をなで回したりしていましたが、あまり苦痛もなく亡くなってしまいました。

こうして、身近なところに遺児がたくさんできてしまいました。どうすることもできず、気持ちも日に日にすさんできて、とげとげしくなってきました。やたらに意味も無くわが子につらく当たるようにもなりました。

そんなとき、一滴も出なかった乳房が痛み出してきて我慢できなくなり、大連病院に診察に行ったところ「乳腺炎」と診断されました。「明日手術をしなければ! 知人がいたら一緒にきてもらいなさい」と言われました。

けれども、半日でも一時間でも仕事を休んできてくれる余裕のある人はいません。その時、気持ちがシャキッとして一人で大丈夫だと決心したのでした。翌日、重い足を引きずりながら手術室に行きました。化膿しきっていたので、メスを入れたとたんに血膿が飛び散りました。幸いに、急所と言われるところを二カ所切り、嘘のように楽になりました。

こんなに悲惨な毎日を過ごしているところに、弥栄国民学校の先生で四国徳島出身の新見先生が、召集解除で大連まで避難してこられて私たちと合流しました。御夫妻で何くれとなく面倒をみてくださいました。先生には「こんなときだから、在村当時のお礼返しをさせてください」と陰に陽になって力付けていただきました。

大連での避難民生活も、貧しく苦しい毎日ながら少しずつ落ち着いてきましたし、治安もよくなってきました。私の体もぼちぼちですが自信がつき、同室の人が探してくれたセーター編みの仕事をするようになりました。長男は、豆腐や煙草の売り子をして毎日の糧の足しに一生涯命でした。私は、日がたつにつれて外にも出られるようになり、大連埠頭の掃除、網梳き、二家族掛け持ちの洗濯仕事などをやりました。集団生活の仕事としては、炊事当番や便所の汲み取りなどをして、高粱雑炊の配給を受ける生活でした。高粱雑炊で、幼児はみんな下痢ばかりするようになりました。やがて、集団生活から個々の家庭ごとに生活をするようになり、それぞれの家の生活は千差万別となりました。互いに励まし、励まされながら一年二カ月が過ぎました。

再び十二月の年の瀬を迎えようとするところに、待望の引揚げの話が私たちのところにも流れてきました。大連港で、夢にまで見た輸送船をこの目ではっきりと見たときには、みんな感激して抱き合って喜んだも

のでした。

主人の消息は全くつかめていませんでした。どうしているのか、どこにいるのか、考えれば考えるほど気が滅入ってきました。そのうえ三歳の女の子と、生まれたばかりの男の子と、二人を亡くした悲しみは例えようもありません。しかし残っている四人の子供は、なんとかして元気に無事に日本の土を踏ませなければならぬと、そればかりを毎日考えていました。

やっと私たちの順番が来て引揚船に乗ることができました。各人は、それぞれ各様の思いにかられながらタラップを上りました。

夢にまで見た日本の島々が見えてきました。感激でした。涙が出ました。反面悲しみがこみ上げてきました。

佐世保港に入りました。下船のときには、真っ白い粉のDDTをいっぱいかけられました。佐世保で、お世話になった新見先生御夫妻ともお別れしました。言葉がつまり、心に思っていたことを全部口に出せませんでした。

昭和二十一年十二月十六日に長野駅着。県庁のお世話で、一緒に引き揚げてきた長野県出身者一同は、善光寺大本殿に参詣して悲憤を残して満州の地で亡くなった物故者（約六十人）の冥福を祈りました。

思い起こせば十二年前、夢と希望に胸を大きく膨らませて満州に行くときに、善光寺に参詣しましたが、こんな姿で再び参詣するとは、だれが想像したでしょうか。

引き揚げてからが、また大変でした。やせ細った四人の子供をしっかりと両脇に抱え込み、いまだに生死不明の主人が、無事に戻ってくることを心の支えとして、食糧事情のあまりよくない伊那谷で過ごしました。

主人は、昭和二十三年にシベリア抑留より無事に帰国しました。少しむくみのある体でしたが、それでも生きて帰ってきたのですから、家族の者はみんな安とし、それからは貧しいながらも家族が揃って、平和な希望のもてる毎日を過ごすことができました。

引き揚げてから毎年吉日を選んで、物故者の霊位を

郡ごと持ち回りで供養を続けました。わが家でも、昭和二十七年に世話役を引き受けて、質素な中で心からの供養会をしました。昭和三十三年には、十三回忌の大供養会を善光寺大本殿にて実施し、以後は霊位を永久に善光寺に納め永代供養をしていただくように決まりました。

昭和十七年生まれの下の子も、帰国のときは栄養失調で、もう駄目かと思っていました。普通にも学校にも通い、今では孫もいる平和な日々を送っています。

主人は、戦前、戦中そしてシベリア抑留の苦勞がたつたつて、昭和三十八年に五十五歳で病死しました。もう少し長生きをして欲しかったのですが、これも運命で致し方ないことでした。私は、主人の分まで長生きするのか……と感謝しています。曾孫も五人で「ひい様、ひい様」と呼んでくれて、亡くなった方々には申し訳ないくらいに、幸せな毎日です。

私と父の満州

静岡県 重岡 良之祐

昭和五年十月下旬に、私は生後二カ月で母に抱かれて満州の撫順に行きました。そして昭和二十一年十月九日に博多港に引き揚げるまでの十六年間、満州で生活しました。満州国の建国から滅亡までを体験したことになります。

幼児期については、母カツから聞いた話をそのままなぞることになりますが、私の満州体験は、父材輔の生活を回想しながら語ることになりました。

昭和六年の夏、母は、私を背負って撫順から奉天に向かいました。奉天にいた父に呼び出されたのです。奉天駅には、「大雄峯会」を主宰する満鉄地方課長の笠木良明さんと、父が迎えにきていました。

顔を合わせるや否や開口一番、父は「これから興城県に行ってくる」と言って二人とも行ってしまいました。